

国語（中）部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

思考・判断・表現の力を育てる授業の創造
～主体的・協働的に課題を解決する言語活動の工夫を通して～

2. 主題設定の理由

激しく変化する現代社会をたくましく生きていく生徒を育てるために、「何を知っているか」という個別の知識・技能、「知っていることをどう使うか」という意味での思考力・判断力・表現力、「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」という主体性・多様性・協働性が求められるようになってきている。その中で私たちは「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視して授業を改善していく必要がある。また、学びの結果として「どのような力がついたのか」という視点も欠かすことができない。更に、言語の教科である国語科としては、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる言葉の力を、言語活動を通して育成することが求められる。

それでは、どのような言語活動を位置づけることが効果的なのか。身につけるべき力を用いて、それらの力の使い方を考え、主体的あるいは協働的に活動できることで達成できる学習活動とは、どのようなものなのか。このような視点を持って授業をデザインすることが、確かな言葉の力を育てることにつながるはずである。

3. 研究仮説

習得させたい力を明確にし、主体的・協働的に取り組む言語活動を工夫した授業を構築することによって、確かな言葉の力（思考・判断・表現の力）を育てることができる。

4. 研究内容

①指定教材についての実践研究

- ・言葉の力を育て、主体的に学ぶことができる言語活動を工夫する。
- ・第二次研究協議会の場で、指定教材をもとに公開授業を行う。
- ・公開授業、個人研究をもとに活発な議論を行い、方向性を探

②指定教材以外についての実践研究

- ・言語活動の工夫を行い、授業者の授業構想力を高める実践に取り組む。
- ・学習の基礎となる言語能力を高め、言語感覚を豊かにするための実践に取り組む。
- ・優れた教材の開発に取り組む。

③指導者である教師自身の言語力を高める取組

- ・理論（実技）研修会をうけ、各自が実践を行ってレポートを作成し、その成果と課題を交流する。
- ・第二次研究協議会において「指定教材」を共同で教材分析する時間を設ける。

5. 研究方法

- ①各市町村単位で「地域サークル」を組織し、指定教材を中心に地域単位での共同研究を行う。その成果と課題について議論を行なった上、専門部会第二次研究協議会に持ち寄る。
- ②中心グループによる研究成果を、専門部会第二次研究協議会において公開授業として発表する。さらに部会協議において、研究主題にせまる研究内容や成果などを部会員によって研究協議する。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

4月12日(火) 石教研第一次研究協議会
 15日(金) 各市町村で第一次研究協議会
 9月9日(金) 各市町村で第二次研究協議会

10月14日(金) 専門部会第二次研究協議会(千歳)
 2月10日(金) 各市町村で第三次研究協議会

2. 専門部会第二次研究協議会での交流

(1) 専門部会第二次研究協議会での交流内容

1年生 教材名『空を見上げて』

授業者：前田 成子 教諭(千歳市立向陽台中学校)

本時の目標

- ・言葉のもつ人と人をつなげる力について、自分の考えを持つ。(他に伝える)

<本時の展開>



	生徒の学習活動	教師の働きかけ	留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の選んだ句とその理由を想起する。 ○学級ごとに選んだ句を発表する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">人に伝わる言葉(の力)について考えよう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○前時を想起させる。 ○発表をもとに、本時の目標を確認する。 	※本時の見通しを持たせる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の課題を理解する。 ○それぞれ理由を考える。(2分) ↓ ○隣席の人と話す。(2分) ↓ ○小グループ隊形で交流する。(4分) ※ボードを利用しても良い。 ↓ ○学級内でまとめ、ボードに書く。(15分) ↓書く時間(3分) 覚悟(1分) ○学級ごとに発表する。(6分) 	<p>発問① 選んだこの句はなぜ印象に残ったか。 ※予め時間設定を告げる。</p> <p>補助発問② 心を動かされる言葉って なぜ惹かれる どんな言葉に胸がつかまれる</p> <p>※ボードは聞き手に見せ、話し手は聞き手を意識して発表することが望ましい。</p>	<p>※時計を見て、それぞれ進むことが望ましい。</p> <p>※移動する場合は時間を考える。 ※発表者も選出しておく。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○本時を振り返り、どんな言葉が人の心を動かすか各自で理解する。 ○本時を整理・評価をする。 ○どんな五・七・五をつくるか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○各学級で出されたことを整理する。 ○設定課題を再確認させる。 ○次時は句をつくることを告げる。 	※次につながる評価をする。

<授業者より>

- ・3クラスの差がありすぎるので、その段差をなくし、同じ育ちをした上でクラス替えをしたいという意図があり、学年国語という形態をとった。アクティブ・ラーニングを意識した授業を構想した。
- ・「体験に裏打ちされた言葉が、人の心を動かす」というところに落としかけたが、それが出てほっとした。

<意見交流>

- ・学年とは思えないほどの集団の一体感が素晴らしかった。電子黒板等を上手に使いこなしていた。
- ・「想像力」という言葉が最後に出てよかった。同じ経験をしていなくても、言葉があることで想像ができるので。
- ・授業者のいろいろな意図(クラス編成、支援の必要な子への配慮、言葉との関わり...)が詰めこまれた授業だった。
- ・「これからずっと言葉を使っていくことにつなげていきたい」という授業者の姿勢に共感しました。

2年生 教材名『科学はあなたの中にある』

授業者：板橋 友子 教諭（千歳市立青葉中学校）

本時の目標

- ・資料から事例や主張を読み取り、小グループで交流する。【話す聞く】
- ・テーマに沿って、自分の考えや具体例・体験を書き出す。【書く】
- ・テーマに対する自分の考えをまとめる。【書く】



<本時の展開>

時間	生徒の学習活動	教師の支援
5	1. 音読練習をする。 2. 前時までの復習・確認をする。 3. 本時の学習課題・内容を知る。	1. 音読練習をする。 2. 前時までの復習・確認をする。 3. 本時の学習課題・内容を提示する。
	【確認】あるテーマ『夢』について、自分の主張から意見を考えます。そのための資料を用意しました。今日はそれを読んで、自分の主張の参考にします。	
	【課題】テーマについての資料を読み、主張や事例を読みとる。	
25	4. テーマ『夢』を確認する。 5. 資料を読む。 6. 【資料：小谷さんの話】から、小谷さんの「夢」についての主張部分を読み取り、——線を引く。 ↓ 小谷さんの体験・エピソードや事例を読み取る。 7. 他の資料（学食のおばちゃん、花火師）の主張・エピソードを読み取る。	(指示) 4. 『夢』の語句の意味を確認する。 5. (電子黒板使用) 教師が音読する。 6. 【資料：小谷さんの話】から、小谷さんの「夢」についての主張部分を読み取り、——線を引かせる。 ↓ 小谷さんの体験・エピソードや事例を読み取らせる。 7. 他の資料（学食のおばちゃん、花火師）の主張・エピソードを読み取らせる。
15	8. テーマについてのウェビングをつくる。 (ワークシートにメモ：10～15分) 9. ウェビングを参考に、『夢』についてのメモを記入する。 10. 時間があれば、班で交流する。 (他の人の意見をメモするなど)	8. ウェビングをつくるための質問をする。
	①小さい時の夢は何でしたか。 ②なぜそうなりたと思ったか覚えていますか。 ③今もその夢は変わらないですか。 ④今の夢は何ですか。(身近な夢は何?) ⑤その夢に向かって、今自分がしていることは? ⑥これから夢に向かってやろうと思うことは? ⑦夢に向かって行く時、途中でどんなことがあると思いますか。	
5	11. 次回の学習内容を知る。	11. 次回の学習予告をする。 自分の主張を考え、『夢』についての論説文を書いていくことを予告する。



<授業者より>

- ・論説文の形式について学ばせたい。順序を入れ替えたので、今後の「モアイは語る」の指導につなげたい。
- ・今回の授業については道徳的な内容になってしまいがちなので、国語の学力として明確にしていきたい。

<意見交流>

- ・テーマ「夢」の取り上げ方、教材選定が良く、文章化に発展させることができていた。
- ・ウェビングの具体的な指示が効果的で、生徒同士の交流の機会を持たせたことがとても良かった。
- ・自分の考えを持たせる、表現、深化は難しいが、書かせる雰囲気づくりがうまくできていた。

3年生 教材名『作られた「物語」を超えて』

授業者：清水 克寛 教諭（千歳市立千歳中学校）

本時の目標

- ・誤解による悲劇にどう向き合っていけばいいか、自分の考えを深める。【読む】



<本時の展開>

段階	時間	学習活動	教師の活動と留意点	評価
導入	5	課題の確認	ワークシートの配布 課題の配布 課題の提示	
		課題 誤解による悲劇に、どう向き合えばいいか。		
展開	8	事例（マンガ）を読む。 考えを進めていく上での約束事を確認する。 個人で考えたことを、ワークシートに記入する。 小グループで話し合う。 ・個人で考えたことを発表する。 ・他の話を聞いて、なるほどと思った点をメモしながら聞く。 ・小グループの意見を何点かにまとめて、画用紙に書く。 ・画用紙にまとめたものを黒板に貼り出す。	用意した事例の途中までを提示する。 事例を考える上での約束事を確認する。 ・解決に向かう方向で考える。 ・行動を考えて書く。 ・考えたことに理由をつける。 机間巡視 ・具体的に考えられるよう助言する。 机間巡視 ・話し合いがスムーズに進むよう、助言する。 画用紙の配布。 事例を最後まで見せる。	筆者の主張に即して、自分の考えをまとめることができたか。【読む】 他者の発表を聞きながら、考えを深めることができたか。【読む】
まとめ	12	各グループで発表	筆者の主張との関連に触れる。	
定着	5	授業を通して感じたこと、考えたことをワークシートに書く。	ワークシートの回収。	授業の感想をまとめることができたか。【関心】



<授業者より>

- ・国語科といいながら、道徳の授業になってしまうのではないかと考えた。クラスの実態も踏まえると、あえて道徳のような感じになる方向に舵を切ってしまった。
- ・3, 4人グループで、話しやすい状況をつくるようにした。事例をマンガにして、生徒の日常の問題に目を向けさせるように工夫した。

<意見交流>

- ・普段の信頼関係が伝わってくる授業だった。小グループだったこともあり、話し合いも和やかに進んでいた。
- ・文章を一通り学習し終えて、生活に広げていくという点で、理想的な学習指導だった。
- ・ノート指導が日常的に行われていることが、よくわかった。
- ・小グループ同士の意見交流の場があれば、より考えの深まりがあったのかもしれない。
- ・道徳の授業なら、出てきた意見に対して「普段できているかどうか」と生徒に問う場面も考えられる。

(2) 専門部会第二次研究協議会での協議内容 (分科会での交流)

討議の柱

生徒が主体的に学ぶことができる言語活動の工夫



分科会① <レポート交流>

学年ごとにレポート交流を行った。指定教材に対する多くの実践が寄せられ、新たな教材価値の発掘など、教材研究や言語活動の観点において深まりが得られた。以下、学年別に中心となった話題についてまとめた。

1年生

指定教材『空を見上げて』(随筆)『幻の魚は生きていた』(説明)

- ・新聞記事を導入に使用する。・要旨は指定条件をつけてまとめさせる練習。・体験していないことを学習するのは難しいが、想像することは大事。・説明文、論説文の三段構成は1年次からしっかりとらえさせたい。・女川の中学生の句を鑑賞し、そこにこめられた思いを読み取る。自分たちでも創作してみる。・震災についての体験を語るなど、イメージを持たせる展開。・映像を見せるなども一つの方法。・語句の意味調べなど丁寧に取り組ませている。

2年生

指定教材『生物が記録する科学-バイオリギングの可能性』(説明)『科学はあなたの中にある』(論説)

- ・視聴覚機器や教材の工夫の実践。・教材のイメージを持たせるための、生徒への提示の仕方はポイント。・スケッチノート実践。文章を読み込んだ後の活動として、要旨を捉えたり、自分の考えを発信するなどの機会。・説明文、論説文、意見文とは何か、記録文など文章の種類について考えさせられるレポートもあった。

3年生

指定教材『作られた「物語」を超えて』(論説)『誰かの代わりに』(論説)

- ・言語活動のアイデアと、教えるべきこととの関連。・生徒の実態に照らし合わせて考えさせる。・言葉や文化の違う民族の間の誤解。・新聞やメディアの主張、立場の違い。・主張とどう結びつけるかを考えること。・この教材から何を読み取るのかを中心に据えた言語活動を行うことが重要。

分科会② <小グループでの共同教材分析>

各学年提言者

1年生 『幻の魚は生きていた』授業実践試案 川村 佳広 校長 (千歳市立青葉中学校)

2年生 『漢詩の風景』への取組 柏 裕 教諭 (千歳市立北斗中学校)

3年生 「「わかる」をスタートに「書く」をゴールに」 田辺 浩子 教諭 (江別市立大麻中学校)

学年ごと小グループに分かれて共同分析を行った。各学年の提言を受けて、その後小グループでの単元略案づくりに臨んだ。ベテランの先生方による提言は「全ての発表を聞きたかった！」という声も多く、大変参考になる内容だった。どのグループからも様々なアイデアが出され、今後の日常実践のための充実した時間となった。



Ⅲ. 教育課程の研究

今年度は、教科書に新しく採択された教材に関わる研究にも取り組むことができた。第二次研究協議会では、授業配当時数を始め、各教材の関連性、指導目標などを交流し、次年度へ向けて多くの成果を得た。このことにより「生徒が主体的・協働的に課題を達成する言語活動の工夫」という目標に向けて新たな手応えをつかむことができた。次年度以降も、学習指導要領にもとづき、これまで積み重ねられてきた実践・研究成果を活かしながら、部会員の意見・要望を集約して編成・改訂を行っていききたい。



Ⅳ. 理論研修会

1. 理論研修会

- (1) 日時 11月4日(金) 15:00~16:30
- (2) 場所 石狩教育研修センター
- (3) 講師 安藤 修平 氏 (「言語・教育研究集団」主宰)
- (4) 演題 主体的・対話的・深い学びへとつなげる授業のために
—「走れメロス」を例にして—
- (5) 内容 ①なぜ、「主体的・対話的・深い学びへとつなげる授業」にならないのか?
②「主体的・対話的・深い学びへとつなげる授業」にするには?
③いかなる場合も「生徒の側に立つ」こと。
④「走れメロス」学習系統図の紹介。



2. 理論研修会の成果

安藤氏による理論研修会では、今どきの子どもの実態を直視し、どのように子どもを捉え導くべきかという示唆に富んだ話をいただいた。色々と授業改善に取り組んでもなかなか成果があがらないという、皆が持っているであろう悩みに対し、改善に向けたひとつの視点を与えていただいたことで、とても満足度の高い研修会となった。ともすれば、教師主導、「言語得意タイプ」の生徒中心の授業展開になりがちだが、そうならないための工夫や努力が必要であることを考えさせられた良い機会だった。

Ⅴ. 部会研究の成果と課題

<成果>

今年度は役員が新体制となり、新たな方向性を求めて研究体制の確立にあたった。各教科において「言語活動」「アクティブ・ラーニング」などの言葉がよく使われる。言語の教科である国語科としては、特に「言語活動の工夫」のある授業の構築が求められるのではないだろうか。指定教材を中心にした研究のスタイルは踏襲し、今年度は説明文・記録文を対象とした。また新教材が採択されたこともあり、第二次研究協議会のレポート交流の場では、各校の実態に合わせた様々な授業実践が紹介され、個人内研究の深まりを得ることができ、有意義な時間になった。また、小グループでの共同教材研究では、教材研究について新たな視点を得ることができたという感想を多く得られた。加えて、自らの授業づくりだけにとどまらず、理論研修会を通し、授業構想への新たな視点を持つこともできた。

<課題>

指定教材を設けて研究を進めていくスタイルが定着している。しかし、共通の話題として深まりが得られた一方で、その他の教材や個人の実践などの広がりが見られなかった。今後しばらくは教材研究中心の活動が進められていくことになるだろうが、それ以外の側面をどのように補強していくのかは今後の課題である。物語文や説明文教材以外にも、詩や古文などについての実践交流も考えたいという部会員の意見も尊重しつつ、今後の研究を進めていきたい。研究として一つの指針を打ち出すためには、更に多くの実践研究と考察が必要である。次年度以降も、より幅広い分野を網羅しつつ、研究が体系的に積み重なっていくような研究体制の確立が求められる。

(文責 柳本 真理)